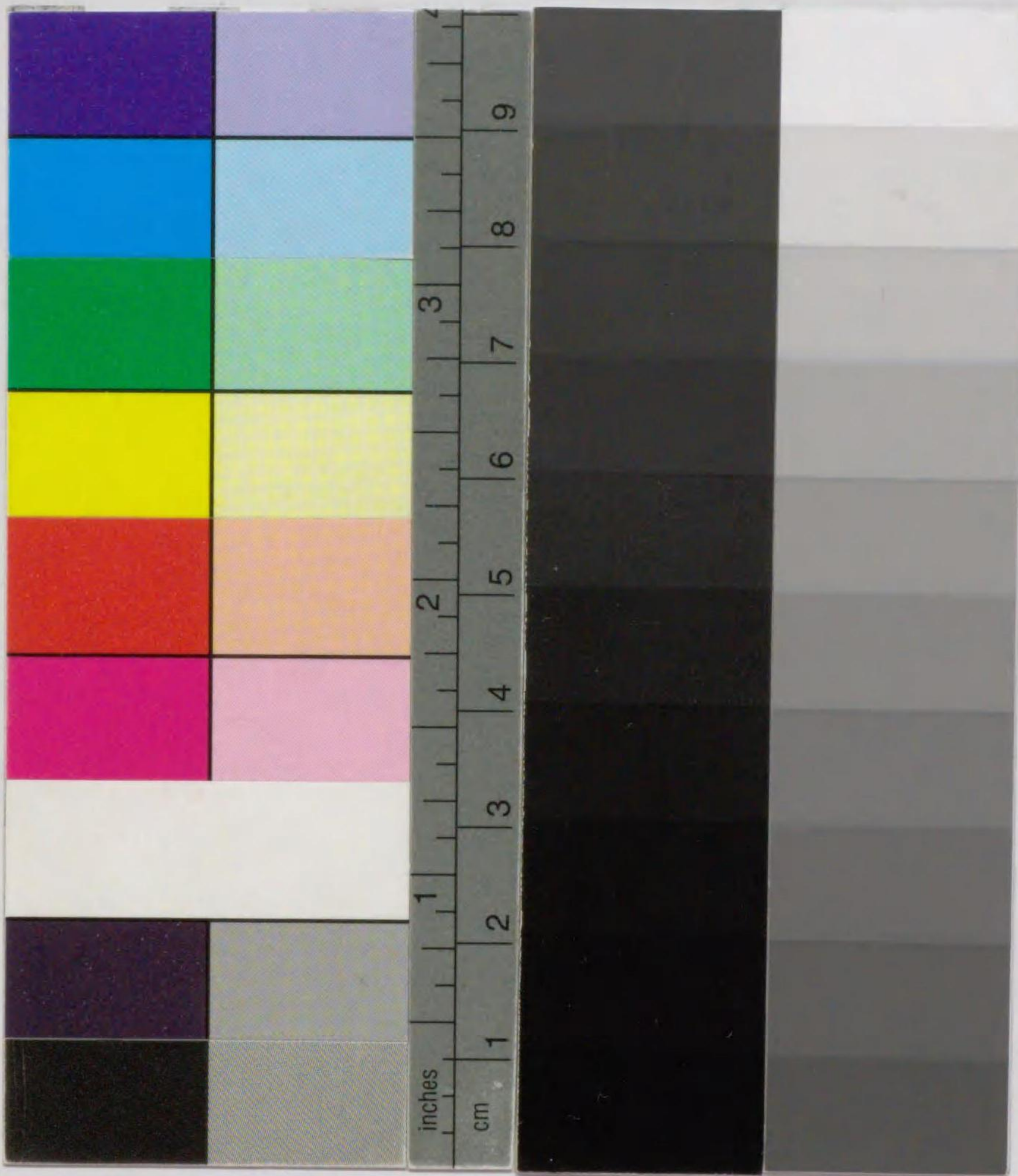


通志

第十二

157

107





山

紀元二千五百九十二年版

磯谷紫江氏
寄贈本

第十二



奧山會刊

奥山會軒矣

第十二

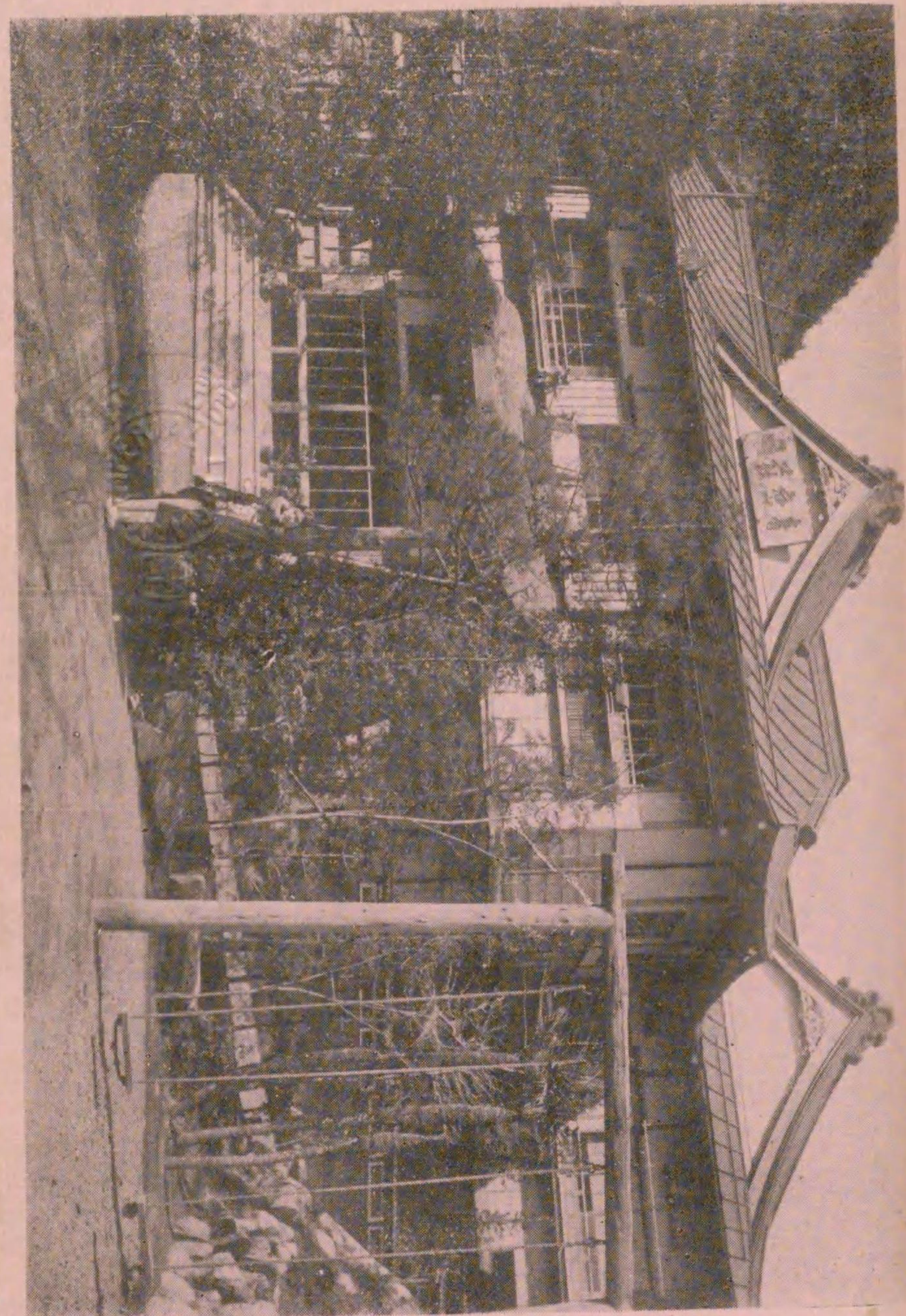
奥山

昭和十一年四月二十日

奥山會軒



一七に園瀧仙・原河廣一 影撮念記會談漫蹟墓 回十二第



莊 樓 青 泉 温 原 河 廣 州 相

廣州河原溫泉溫泉

— 藤木川上流 —



藤木川上流

湯河原 眞鶴 伊豆山 熱海

三月十九日午後五時三十六分品川驛發で、廣河原温泉、青巒莊に赴く。列車は満員、横濱驛まで立往生、ヤット横濱驛で下車するものあり、坐席にありつく。ホームまで宿の番頭さんが出迎へてゐた。

直ちに、ハイヤーで青巒莊の別館につく。明るい感のよい部屋である。今日は別に八畳二々室を空けておいたが、別にお手紙にその由がないので、閉ざしてしまつたと云ふ。夜半になつてかなり強い雨になつた。明日は、どうなることであらう、瀧の音と藤木川の流れの音をききながら、安らげきれむりに落ちる。

一行を湯河原驛に出迎へるので、早目に朝飯を済まし、ハイヤーで驛までゆく、列車到着まで、まだ三十余分程あつた。驛前をトラックうちに、一行中第一番目に高木さんのお顔が見えた、總勢八十余名、近來にない盛會、直ちに、驛前の城願寺に赴く。途中まで住職が出迎へてゐた。境内の源頼朝記念手植の柏檀はたいしたものだ。本堂前で記念撮影をする。次で沼田先生のお案内で、小早川元祖土肥氏累代の墓所へ、委細な説明を先生からおききをする。それから墓地境内下の、古墳發掘箇所を導かれて、發掘當時の模様をおききする。休憩のため本堂に登ると、雪交りの雨が降り出して來た、

困つた天氣と皆さんが心配される、その間を利用して、縣からのお挨拶があり、風外和尚について眞鶴町長松本氏のお話があつた。寺では、お茶菓子の外にお刺身やら章魚の酢付やらその他のお肴を添え、ビールもあり、仲々たいした歡待振りに恐縮をする。晴れ間を見て、一行はもと来た道を戻らずに驛構内を抜けて、湯河原乗合自動車の車で眞鶴小學校に赴く（貸切となつてはゐるが一人前三拾錢の料金）お馴染の女車掌さんの車に乗り込む。途中、小道地藏堂に立寄る。本堂内に疑問の石の地藏尊があつた、三脚をすへたが撮影する間のなかつたのを残念に思ふ。

小學校の樓上から、眞鶴港を撮影する、皆さんが、廣河原に行くと云ふので宿に電話をかけて、ヤツト部屋を心配して頂く。小學校女先生連のお給仕で中食の接待にあづかる。お刺身と、鯖の味噌煮で、おいしく頂戴することが出来た。

船で港内の風光を賞する組と、陸路伊豆山神社行の二々組とになつたが、後者の希望がないため、海路を更に伊豆山にのぼして一行すべて、伊豆山に行くことになつた。

船に乗り込む前風外先生の遺跡をたづね、天満宮のお宮を撮影する。

縣の船にすべて乗り込めず、臨時傭入の船に自分は乗つた。二艘がこころよく、港外をはなれる頃

の風光は捨て難き眺めである、切きりに松本町長さんがお紹介をしてゐた。殊に、眞鶴の赤壁は堂々たるもので、三ツ石の笠島などは、激賞するにあまりある風光であつた。

風がまた少し強くなり、雪と雨交りに出會あつて、身体を少しぬらすことになつた。

雨と雪降るや海の上の上

五十五分の後ちに、伊豆山の防波堤に船が横付となつた。ここで一ト先會散と云ふことになつた、一行の篤志家は、伊豆山神社に參拜、遅ればせに、自分も寶物倉で、寶物を拜觀した。

伊豆山から、また熱海來宮の大楠と、湯前神社の湯泉碑を見物するために、再び乗合を貸切つて、來宮神社まで乗つて來た。料金一人前二十五錢の約束が、二十錢になつた。大楠の前で記念撮影をする。

湯前神社で文は信陽、書は東江、明和七年の温泉碑を見て、間歇泉大湯境内の英國公使サー、ラザーフォールド、アルコフク題名の碑の拓本をとる、遅ればせにかけつけて、御用邸の拜觀の榮に浴する、而して、『元熱海御用邸沿革』、『熱海町勢一覽』、『温泉と民謡の伊豆』の三部を頂戴する。ここで最後の會散となつた、我等の一行は更に、車二台に分乗して、湯河原町へ、更に、車を乗り換へて、青巒莊につく。一行のうちに、沼田先生、同令息、深川さんお夫婦、矢吹活禪さん、永江維章、田口荏

庵、廣瀬榮一さんと私の九名。別館の三部屋に陣取つて、廣河原の氣分を味つて頂くことにした。翌朝、莊前で、記念撮影を終り、仙瀧園に赴く、充分湯に浸つて頂いて、二時すぎ中食を済まし會散をした。

お會計お勘定

- 一金八圓也 自動車賃二台(熱海お用邸より湯河原町迄) 一金貳圓也 同上(湯河原より青巒莊迄)
- 一金貳圓貳拾五錢也 お酒 一金貳拾八圓也 お泊(八人分)
- 一金拾貳圓也 中食(八人分) 一金七拾五錢也 電報料
- 一金參拾錢也 切手代 一金參拾貳錢也 煙草
- 一金五拾錢也 仙瀧園茶代 一金九圓拾錢 銀ペンにて
- 一金五圓也 御祝儀 一金貳圓也 銀ペン往復自動車賃
- 外=
- 一金四圓五拾錢也 笹 飴 (お土産) 一金五圓也 茶代
- 一金五圓也 雇人一同祝儀

湯河原紀行

——第二十回墓蹟漫談會——



前月の墓蹟漫談會(第十九回)の席上で、紫江君蘭溪君等の一味徒黨が、相州湯河原の奥廣河原温泉の形勝を話して、安直で清潔で野趣漫々、至極のんびりとして居心地がよいなどと、仙界へでも往つたやうに推稱すると、誰やらが此會も二月は陽氣にそ

んな別天地へ繰出し都塵に塗れた垢を洗ひたいなどと云出す。正直な紫江君が、ぢやア今度は一ツ廣河原温泉の青巒莊を借切つて墓蹟漫談會の總動員といたしませうと呑込んでしまひ、早速出遊團體の設計を企て、二月二十七日の土曜日午後

四時に新宿驛へ集合して、小田急と省線の電車、湯河原から自動車で出征といふ段取を極め、翌二十八日の日曜日は其邊の探勝かたぐい山狩をして獲物の猪鹿を鋤焼にでもして中食後解散、お好きな方は更に熱海なり伊東なり伊豆山なり古奈方面なりへ御回遊の御都合にと觸出した。ところが期日前に彼是十二三人は同行したいといふ回答があつたさうで、老生などはいつても若い血氣盛りの人達から邪魔者扱にされるので、此度も仲間はずれと覺悟して居たが、邪魔にはせぬからゴマメのトトまじり是非同行せよと、紫江君頻に勧める。其一言が甚く嬉しかったので、偶にはキンの皺伸しも結構と、全くの處萬障一排で同行と決意した。

さて當日の朝はいつもの時間より二時間も早起をして午前中に日課を片付け、午後一時には吾屋を飛出し、一二軒用達をして一時五十分、駒込驛を發車、二時そこ／＼に新宿驛に下車、待合の塗板に著到の事を書付けて置いて、驛前の一茶庵に片倉康雄君を訪ふと、今日は出征軍人の見送に出懸けて不在、だが今に歸る

から待てとの事で一時間も待つて居たが歸らない。シビレを切らして、今にも歸つたら驛の待合室に居るから聲を懸けてくれと頼み置いて驛へ駈付けると、三時といふのにまだ一人も來て居ない。全く拙者一番乗と少し反身になつて鼻高々、後れ馳せの諸君を窘ませくれんと手具脛引いて居たが、三時五十分になつても誰一人影を見せない。ぼんやり人を待つといふこともあまり有難いものではない。正四時といふ頃忽然と顯れたのが根本二三惠女史だ。見るといつもの元氣は銷沈して甚くやつれが眉宇の間に漂つて居る。寒暄の挨拶が濟むと、さて私は今日御伴をしたいのは山々ですが。二三日前から風邪をこちらして昨晚は夜一夜咳で一睡もしなかつたくらゐ。その咳ツたらとても猛烈、傍で聞いて居られない程の咳入り方、折角お樂みにいらッしやる皆様の安眠妨害になつては濟みませぬ。いッそ御遠慮したがよからうと、母も注意しましたやうな譯ですから、御見送かたぐい御斷りに參りました。それで磯ヶ谷さんに御目に懸つて御斷りを陳べますといふ。

四時二十分にもなつた頃、紫江君は重さうな鞆を提げて大汗ダクで駆込んで來た。ナニ其大荷物はいふと、これは寫眞機械でカビネが十四五枚用意してあるといふ。といつたところで同行はたつた二人だよといふと、そこで女史が不參の事情を陳述する。紫江君改めていふには、今日になつて急に不參者が續出して剩す所極めて少數だ。それに定刻になつてもこんな状態ぢやア不入に極つて居るから、寧ろ三月六日の日曜にしようかなんて云出す。處へ勇壯活潑に繰込んで來た辻直君、ヤア諸君失敬……遅刻しました。皆さんは？……皆さんは是ツ切サ此中で二三惠さんは見送に來たので、一行は三人サ。フームさツぱりしたもんだネ。ところで三月六日に延期するか、乃至此の三人で斷行するかだがネ、どうしたもんだらう。辻君は即座に、僕はどツちでも賛成だ。往つてもよし、往かんでもよし……何だ筒井順慶か。折角往かうと思つて出て來たからには、同行の

多少は問ふところでない。神様が往けツといつて突出してくれたのだから往くでしょう。就ては二三惠さんだ。風邪で咳が出るといふ病體だが、野郎三個ぢやア……ハンバで面白くねえ。病氣で僵れるのも運命、戰場で死ぬのも運命、死を見ること歸するが如しで、一ツ國家の犠牲になる氣で同行したまへといふと、イエ今日は御斷りに參つたのですから、此儘歸らないと宅で母が心配します。そんならわれ／＼三人で阿母さんに御願しようと、衆議一決、澁谷驛まで電車で往つて根本さんの御宅へ伺候し、阿母さんに御目通りして二三惠さんをお預りした。その口上は……東京よりか彼地は暖國であり、山と海との空氣はよし、温泉の蒸汽を吸入すると、氣管が丈夫になつて、風の神なんか二十キロ以上吹ツ飛んでしまひますから、それに湯に漬つて暖くなつたところで直に寝かしますと、好い加減な定文句を並べて阿母さんを烟に捲いてしまつて漸うと連出したのは、宛然不良のやりさうな手段。紫江君は是非とも品川の五時三十六分發に間に合せよう

と、一臺の自動車を呼止めて四人ガチャ／＼に乗込むと、スピードを出して威勢よく品川驛へ飛ばした。著くと根本女史は驛前の賣店へ駈けて往つて飴を買つて來るといふ。成程咳には飴が好い、一電車後れるが仕方がない、早く買つていらつしやいと、洋傘と風呂敷包を受取る。辻君は、僕は一寸藥屋へ往つて來るといつてサツサツと駈出した。時刻が進んでモウ次回の電車は構内へ入つて來たが、二人は戻つて來ない。氣を揉んで居るうちに根本さんは息をはずませて駈けて來たが、辻君はなかく歸つて來ない。五時五十九分の電車は到頭發車した。

一分過ぎて辻君手持不沙汰に戻つて來た。藥屋は何處なんだ。イエつい其處にある藥局だがネ……僕はどうも床が變ると寐付かれない性分で、今夜もどうかと思ふから、催眠劑を用意して往きたい。それでカルモチンを仕入に出懸けたのだが、藥局の主人が不在で細君ばかりだからカルモチンは賣れないといふ。それ

ア近頃カルモチンの情死が流行するから、俺が情死でもすると係り合ひになると思つて警戒して居やアがるんだ。カルモチンの纏が眼の前にありながらそれが買へないのは残念だ。だから然う云つてやつた。俺は藥劑師だから何もかも承知して居る。カルモチンの一回量ぐらゐで人間が死ぬるものぢやアない、大丈夫だから賣れといつたが、細君なかく承知しない。憎らしいから横づつぽを一ツ御見舞申してやらうかと思つたが、先が繊弱い女の事だから寛仁大度の度量を示し、手を空しくして歸つて來て、此處でまた時間を空しく費すのは、重ね／＼残念だと、空しさと残念さがこみあげて來てハツクシヨイ……。仕方がない次の電車を待つばかりだと、プラットホームへ出たが、海寄りの火の氣もない吹曝しでかなり待遠しい時間をまた空しくした。そのうちに六時十三分の静岡行の汽車が著いた。どうせ待つなら横濱まで伸して次の熱海行電車を待たうと、四人一かたまりになつて静岡行に乗る。間もなく横濱に著く、下車する。硝子張の待合室に

飛込んで、木炭をカン／＼起した火鉢を取巻き両手を翳し、次の熱海行が来るまで蜜柑の汁を吸つては息をついて居る。程なく熱海行電車が迂り込んで来たのであたふた乗込んでこれで漸々と人心地になつた。然うなると意地の汚いもので聊か空腹を感じる。紫江君が勾配早く仕入れて来た崎陽軒製シウマイの折を開いて銘々にバクつかせる。二三惠さんが風呂敷包を解いて祇園のホコ／＼まんぢうを出してくれる。保姆の與へるまゝに、かき餅を噛み梅干飴をしやぶる。坊やは正に五六十年若返つた。電車はずん／＼駆けて湯河原に著く。自動車に飛込むとフルスピードで夢現湯河原の町を駆抜け、藤木川に沿ふた山路を突破して、午後九時十分かに青巒荘の大玄關に横付け、直に梅の間へ御案内……初めてホツと一息、笹巻の熨斗梅を點心に御茶を賜る。

○
差詰め幹事役の紫江君、直に御膳を出しますか、それとも一風呂召しますか……

……。時刻は後れて居るが、車中のシウマイ其他の詰物が累を成して千松も六十パーセント。何はともあれ御目當の温泉に浸りやせうと、先づ女史をおさきにと追立て、暫く時間を計つて野郎三人ブルへ飛込む。引違ひに女史は上る。三人救命器に取付いてポチャ／＼やつてせい／＼腹を減して上つて來ると、ちやんと御銚子が付いて、御料理が並んで居る。嘻！此時ばかりは無上に好い氣持であつた。凡そ遊山の旅をして、天氣はよし、山海の空氣を呼吸して四肢の運動をして旅館に著いて温泉に浴し、上つて大胡坐になつて。今無遠慮氣兼ねしに食卓に向ふといふ時、これを慷慨し悲憤するものは、まづあるまいと思ふ。况や我等は宇宙の眞理を憧憬する哲學者にあらず、百萬陀羅理屈を捏ね廻す法律家にあらず、先祖傳來貧乏は人後に墮ちすと雖も晦日に臨んで悠悠温泉に遊ばうといふのんき千萬な臆病者共。されば家庭を忘れ、職業を忘れ、借金を忘れ、時局を忘れて、一日一夕の閑を偷む白徒。何が不足でダダを捏ねべきや。無上甚深微妙の安養淨

土、茲に初めて世外の樂地あることを知つたのであります。漸うおなかも北山時雨、甘露の一杯に枯腸忽ち春暄を覚え、椀皿猪口の見境もなく牛飲馬食盤上に殺なく盤下に殻なし。飯も腹さんざ詰込み、あとは黍糕の茶話會とあつて、取止めない感想、ヒヤカシ、駄洒落、愚漫談に時の移るを知らず、既に十二時を過ぎる／＼眼の皮のたるみを覺えた。

眼の皮の樽神輿をば御旅所の

假屋の床へ擔ぎ込まなむ

いざや御遷座と次の寢室を打見遣れば、羽二重仕立の夜着蒲團、友禪の花模様は紅藍白黒黃滿地と滿蒙國旗の色を染分け、厚總附けた括枕は常磐の色の松緑、巢籠りの鶴の枕と覺えたり。繁華一夢人不知、萬事邯鄲品公枕と古い文句を呟いて、今一風呂は不老門前の時刻遅くも、ぐっすり寢込む長生殿裏のとんだ夢、いよく以て蓬萊の仙家に宿る心地でした。

こゝで男性三、女性一の配當を按ずるに、梅の間は一號二號の兩室に分れ、各八疊敷。四人を二ツに割ると、一室は男一女一となる。何しろ澁谷の阿母さんからお預りした大切な嬢さんを男子一人が一室内でお守するといふ事は瓜田の屁理窟李下の疍癩にさはるから、女性を中に左右一人づゝ大臣が目ツ張リコで守護するといふ事になつて、到頭辻君と老生とが番人役、紫江君が別室で單騎斥候といふ役割になつて、梅の間第一號は三人、第二號は一人といふ事に決定した。いよ／＼十二時過に女史を湯に入れて真中へ寢かせ、我々も亦一風呂暖まつて左右の寢床へ入ると、ノートカルモチンの辻君、苦肉の謀計を案出して、宿の女中に講談本武勇傳の借覽を申込んだ。女中が持込んだ講談雜誌を手にし横臥して電燈の下で默讀を始めた。女史は湯で暖まつてから心配した咳も出ないので辻君に話しかけたが、雜誌に見入つて相手にならぬ所から、老生の方を向いて盛に話し出した。

出す折から、谷鳥の囀も聴え、庭の八重梅山家の春をまのあたり。崖には残雪白く流れ、麓には竹林蒼く連り、樵逕の土荒れて枯草黄を布き、常緑の葉陰に山椿朱を點する、天工の色彩繪よりも巧みに、清艶と寂寞、ましてや溪谷の大觀は筆舌のとても及ぶ所でない。四人は輕装して青巒莊を出で、爪先上りの岨路を辿り溪に沿ふて登る。みちすがらなる隱居の梅林うれしく、松竹梅の蓬萊尊く、道草の土筆蕨はまだ見えねど、蓬露の臺の先づ萌出でたるが愛しく、巨巖の破目より數竿の竹の生ひ出でたるも奇なり。名さへ知らぬ異草珍樹の下には虎豹嘯く磊砢あれば、藍を湛へて屈曲せる汀に鯢魚攀る平磐あり。岸に砒藻茂り水滑に翡翠を藏し、瀨に激浪騰り巖遮つて白兔を躍らす。見上ぐる彼方の仙龍園に辿り著けば園の主人迎へ出で、今日の快晴を祝ひ一行の健脚を稱ふ。茅屋竹柱式の小亭二三亭後に果圃竹林を繞し、笕の清水溢るゝ邊に柴焚く煙搖曳する。園は廣く長く花卉を栽ること數畝、蔬菜を栽ること數畝。窄い徑に長蛇の陣を布いた朱冠白衣の

雞羣、跟随して下界の客を畏れず。淡紅の老梅花未だ全く謝し去らで、我等を慰め顔なるも忝し。中央の草堂には正面に自然木の龕を設へ五大佛像が安置してあり、前に大山不動尊祠堂建立勸化の建札あれば、大山不動明王の御分身なるべくや。自然木の大木魚叩けば喝々と鳴り、同じく自然木の大法螺吹けば噉々と吼ゆるを、客は打興じておのゝ叩きつ吹きつ多少の賽錢を捧げて禮拜する。

大山の大聖不動なればこそ

大きな木魚大法螺の貝

或は床几に腰を下して茗を啜り、或は寫真機を擁して樹間を徘徊する。他客も亦佛前に俯して餘念なく合掌瞑目の誠を致すは、渡る世間に鬼はなくとも、しばし憂世を忘れ草、煙霞に一日の佛性を養はんとの同志であらう。

仙龍園にて月夜の景よしといふを聞きて

千兩の値打はあらん咲匂ふ

元の路に引返し、龍蟠虎踞の巖頭に立ちてとり／＼撮影する。老生は溪に下りて石を拾ふ。形よき石にぶつかれば一擧にして數百金の利得はある。慾が手傳ふ蚤取眼、手を傷げ足を痛め捜し求むるまゝに、凡石は數限りなく多けれども奇石といつてはなかく／＼無し。重荷を厭ふが故に、後に得たるもの勝れ／＼ば、前に得たるものを捨て、無駄骨ばかり折つて僅に二三の凡石を斂め、相連れて隱居梅園に小憩する。瀟洒な家居ながら人影を見ず、仙翁今藥草もや採りに出でたる空巢ならんかし。蓬萊丘を過ぎてまた以前の橋を渡る。先刻渡つた時は橋名に氣付かなかつたが、今見れば梅園橋の標あり。橋下の水激湍を成す、上流を見ても下流を見ても確に絶景なり。紫江君は三脚機を擔いで一人ずん／＼歸路を急ぐに、三人は橋際に佇立し、私語して曰く、ごうだい前宵の客の中には好仇を携へての泊込もあつた様子だが、我等は清淨無垢てんでに孤園を守つて一夜を明したので。自慢にもなるまいけれど、一ツ此處で威勢よくお互にアハ、、、と笑つて、孤園三笑といふ名所を遺して置かうよといふ。と今度は期せずして三人思はずアハ、、、と笑ひこけた。橋下の溪は以來虎溪と稱すべし。

辻君昨夜の思出とあつて

据膳の相手なければ梅園の

はしも取り得ず獨寝しかも

女史は今朝の膳部に題して

お情も朝餉の膳の梅法師

酸いも鹹いもかみわけてこそ

老生も負けぬ氣になつて

バラ錢を落せし穴を梅園の

橋のたもとで拾ふ圓石

一一一

紫江君一句

拾ふ石捨てる石梅の咲くことよ

老生また一句

石を踏み溪をわたり梅の里遠し

梅園橋を渡る頃草臥足を引きずりく

うめぞのや汁粉戀しき八ツ下り

二時過ぎ青巒莊に歸著。用意の中食の卓に就き、一休みして三時十八分治装、乗合自動車の厄介になつて湯河原に出で、四時二十五分の急行電車に搭じて歸京の程に上る。紫江君は青巒莊の始末を引受けて居残り、おみやげを抱へた三人一路東京驛へと、虎は千里の藪に還る。

○

當日古屋蘭溪氏は屹と來會の筈なりしに、取引先の三越から百萬圓をこくの支拂があるので、やはり收穫の方には店員任せにもして置かれずとの事で不參。いつの間にか準備がしてあつたらしく、意匠を凝した梅花形の盆に本會紀念同君寄贈の文字を金蒔繪にして會員へ御贈與の御厚志、感涙に咽んで忝く頂戴仕りました。

因に云ふ、老生採石に夢中になり、溪流にて手の汚れを洗ひ、袂から手巾を取出す際、入れて居た小遣錢をバラ／＼とこぼして水底へポチャン。そこら一面珪藻の生茂つて居る中で透して見ても見えず一寸まごついたが、つらく／＼惟るに、つい隣の伊豆には今から七百年程以前に青砥左衛門尉藤綱といふ克明な人物が居て、滑川で十文の錢を落し、これを拾ふために五十文の錢を費して松明を求め捜索させたといふ先例もあり、凡そ落した場所は心覚えをしてあるから、此夏には湯治を兼ね出張に及び、人足を狩集め百萬圓が二百萬圓掛つても右の小遣錢を回

一一三

收するつもり。尤も其内誰かが拾つて所得にしてくれれば回収の費用も助かる譯だが、とにかく今日拾つた石の處分をつければ優に五百萬圓は取上らうから、いづれにしても屈託はないといふもの。拔駈けの拾得御勝手次第、併せて有志の方々へ誘ひをかけて置く次第です。

○
廣河原温泉は神奈川縣足柄下郡湯河原町字宮上小字廣河原にあつて、泉質は鹽化ナトリウム含有の弱食鹽泉で無臭透明、浴用は勿論飲用して可なるものです。

温度は八十度位で人體に適し特に消化器病には功能顯著である。地勢南西北の三面は箱根日金の山々に圍繞され、東南一帯は展けて湯河原町に通ずる溪谷の一閑地で、坦々たる道路開け、近く箱根蘆の湖に出る縣道が築かれつゝある。青巒莊(電話湯河原一一八番)は此中の最も形勝の地に建てられ、總建坪四百五十餘坪の二層樓、側面に白龍の瀑布を見上げ自然の山水が庭苑を作して居る。温泉プール、家族風呂、大廣間客室小間等三十餘室、いづれも設備は行届いて居て、樓下に賣店もあり、幾多の土産物を取揃へ泊客の需求に應じて居ます。夜具器物の類凡て清素であり、取扱も丁寧、それで費用が割安であるといふのが特長とされて居ます。乗合自動車の往復も繁く便宜は缺かぬやうであります。

探勝地區は二三丁の處、遠くても十丁以内。大概左記の通りです。

大 師 堂	七 丁	清 瀧	七 丁
廣 部 觀 音	六 丁	不 動 瀧	三 丁
五 段 瀧	五 丁	屏 風 岩	二 丁
白 龍 瀧	目 前	隱 居 梅 林	一 丁
駱 駝 岩	二 丁	蛇 體 瀧	三 丁
關 白 宿 石	二 丁	仙 龍 園	三 丁
放 鶴 亭	三 丁	關 白 杉	三 丁
山 神 社	八 丁	白 雲 瀧	十 丁

昭和七年三月一日 蛇尾菴 記す

157
1074

No.

印刷所	發行所	製複許不	
		山 奥	二十第
東京市麹町區三番地六九番地	東京府下濰野川町中里一五一	編輯者	磯ヶ谷孝治
邦文舎	明元社	發行者	東京府和田堀町和泉二四三番地
		印刷者	宮西外次郎
			東京市麹町區三番町六十九番地

昭和七年四月廿五日印刷納本
昭和七年四月三十日發行

「限定壹百部」

禁賣買

白龍の瀧よ聞け春の山かな
戸を閉めて歸へりを待つや梅遅し
私語は瀧にも消えず春淺し

*

廣河内・青巖莊にて後苑莊

